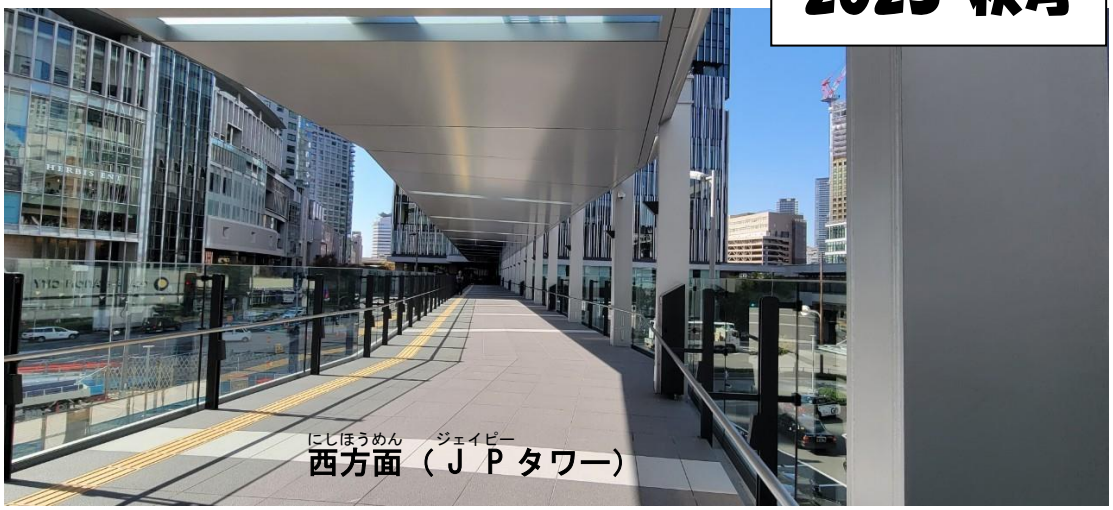
ＫＳＫ（すたこらさん）第三種郵便物承認　２０２３年１２月３０日発行　増刊通巻第３７１０号

ＫＳＫ すたこらさん

大阪駅南側を東西にむすぶ歩行者デッキは便利かも!!

2023 秋号



西方面（ＪＰタワー）

東方面（阪急百貨店・阪神百貨店）

一九八四年八月二〇日第三種郵便物承認　毎月五回（5・10・15・20・25日）発行

7年目の追悼アクション

福島　義弘

7月26日、夜、相模原障害者殺傷事件への追悼アクションが行われた。毎年、事件がおきたこの日に開かれている。去年はぜんかい屋がコロナのクラスターに見舞われている真っ只中だったので参加を見送った。そのため2年ぶりに参加させてもらった。

事件があまりにも衝撃の大きいものだったので、ぼく自身この日が近づいてくると気持ちがなにかかき乱される感覚になってしまう。そんな不安な気持ちから、追悼アクションへの参加をしり込みしてしまうのも正直しばしばである。

今回も不安を感じつつも集合場所である難波元町中公園に赴いた。今までは梅田のヨドバシカメラ前でのアピール活動がメインだったが、今年はデモ行進がメインアクションとなっていた。集合場所から心斎橋を経由して難波に戻るルートを1時間半ぐらいかけて行進する。事件で亡くなった方の人となりが書かれた19本の幟を先頭に、電池の簡易キャンドルやメッセージボードを手に２００人ほど（ぼくの見た目ですが）が後に続く。追悼アクションが始まった当初は亡くなった方の名前は一人も公表されていなかったが、7年が経ち幟にフルネームが書かれた人も出てきている。

デモ行進は警察の誘導を受けながら、御堂筋を進み千日前通りの大きな交差点を渡る。ぼくの思い込みかもしれないが、デモ隊が渡り終えるまで信号機が両方向とも赤になっていたように感じた。やっぱりデモ行進は

相当のインパクトがあり圧巻だ。

デモ隊解散の後、交差点の一角でアピール集会となった。追悼アクションの主催者である金満里さんからアピールを勧められ、いったんはお断りした。けれどもせっかく頼まれたいい機会かなと思い直してマイクを握らせていただいた。

事件を考えるキーワードの一つが優生思想だといわれている。ぼくがこの言葉と初めて出会ったのは35年ほど前の学生時代にさかのぼる。学内での講義の中で障害者に対して差別的と受け取れる内容の発言をした教授がいた。この出来事を差別問題ととらえる学生が集まり教授への抗議と問題点を考えていく中で、その根源に優生思想があるとの展開になった。ぼくは初めて聞く優生思想なるものが自分の中でなかなか腑に落ちなかった。

優生思想の根源、障害があるから人間として劣る。この考えが差別であることはすんなりと理解できる。それなのにぼくの中で納得できない引っ掛かりがあった。「障害があるよりかは無いほうがいい」と自分の心の中に大きくこだまするぼく自身の声があった。

アピールを勧められたとき、ぼくのこの内なる声がこだました。ぼくは人前でしゃべる時、緊張して言葉が出にくくなるし、顔も歪んでしまう。とくに若い頃はこんな自分の障害がいやでいやで仕方なかった。ぼくにこの声をこだまさせる正体こそ優生思想そのものなのだろう。生まれてからこの言葉に出会うまで、ぼくはこの考えに支配された社会にどっぷりと浸かりきっていたのだと思う。

しかし、今日のぼくは心のこだまを消すことができた。そのうえ大勢の人にぼくの中でこだまする声について話

すことができた。次も同じように勇気を出せるかどうかわからないが、優生思想に対してはっきり「ＮＯ」と言っていきたいと思う。

ぼくには学生時代からの関心事の一つに「障害の受容」を考えてきた。この原稿を書きながら見えてきたことがある。障害を受容することは、世の中に覆いかぶさる優生思想を払いのけることにほかならない。このことがぼくの中でやっとつながってきた。だんだんとその感じが大きくなってきている。追悼アクションへの参加は、ぼくにとっては大切なものである。

参加者は黒いリボンをつけて追悼しました。

南くんと訪ねる思い出の場所

生野区の良返屋跡地 編

地下鉄千日前線「小路」駅のエレベータから地上へ出ると、目の前にバス停がある。そこから「あべの橋」行のバスに乗る。20年以上前、南くんが良返屋に通っていた頃にいつも利用していたルートどおりに新今里をめざす。

最近、ぜんかい屋で南くんとおしゃべりをしていたら、「生野の良返屋があった所って、どうなってるんやろう？　行ってみたいなあ～」という話になった。というわけで八月も終わりに近づいたある日、良返屋跡地を訪ねることに。バスに揺られていると小さな橋を渡る。この橋で南くんのなつかしさが込み上げてきた。「新今里」バス停で降りて現地を目指す。途中、天理教教会の横を通っていく。次の信号を右に曲がるとすぐそこだ。この道で間違いない。

しかし、ぼくらの思い出の中にある建物が見つけられない。ふたりでキョロキョロあたりを見渡しながら記憶を確認し合う。そして、「ここだね！」という場所にたどり着いた。建物自体は変わっていないが、正面の外観が大きく変わっていた。目印だった紫色のテントは張替えられ、現在のテナントの名前が書かれている。住居部分の玄関表札を見るとそこに住んでいたオーナーさんも引っ越されているようだ。

良返屋が新今里で活動を始めたのは、一九九六年二月。応援センターの新しい活動拠点をつくろうと「作業所良返屋」は立ち上がった。だが、お金がない。活動資金を確保

するため、３か月間にわたり毎日街頭カンパに勤しんだ。なんば、天王寺、梅田、京橋……日替わりで人通りの多くなる夕方から夜にかけて道行く人に来る日も来る日も募金を呼びかけた。今となってはほんとうになつかしい思い出だ。

良返屋では手を真っ黒にしながら印刷作業に取り組んでいたことを、シャッターの前で南くんと振り返る。お昼ごはんの買い出しによく行っていた万代スーパーも確かめに行ったが、建物は見当たらない。取り壊されたのかな？　近鉄今里駅前の別のスーパーも閉店していた。やっぱり時の流れは、いろんなものを変えていくんだなとしみじみと感じる。ただ、歩道から近鉄今里駅の改札口に通じるスロープは健在だった。ぼくたち良返屋の車いすメンバーが当時頻繁に近鉄電車を利用したことがきっかけとなって設置された思い出深いスロープである。

ぼくたちの活動も大阪市補助金による作業所から障害福祉サービスの生活介護事業所に変わった。良返屋は北区での活動を経て、現在は都島区に拠点を移してがんばっている。応援センターは良返屋の分室としてスタートしたぜんかい屋と居を同じくして事務局活動を続けている。活動のスタイルは変化してきているが、障害者の暮らしやすい「おおさか」のまちづくりを目指そうとする気持ちは忘れないでいるつもりである。（文・福島義弘）

青い芝の会と応援センターの関係は？

～事務局に届いた質問から～

青い芝の会の有名な「川崎バスジャック事件」と応援センターの成り立ちとはつながりがあるのでしょうか？最近、こんな質問が事務局に寄せられた。

この事件が起きたのは一九七七年。応援センターの前身である「誰でも乗れる地下鉄をつくる会」の発足は一九七六年。そして、応援センターの立ち上げは一九七九年。年代だけを見ると一連の流れの中で起こっていると考えてもなんら不思議ではない。障害者が人間らしい暮らしを手に入れるための活動として、根底に流れる思いは通ずるところがあるように感じる。しかし、ぼくが応援センターと出会う15年以上前の出来事を思い込みだけで質問に答えられるすべもない。そこで直接、牧口さんに電話をしてお話をうかがった。

――応援センターの初期の会員には青い芝のメンバーもいたと思うよ。でも、応援センターが青い芝からできたというわけではない。川崎バス闘争のように青い芝のイメージは、強い障害者だった。でも、障害者が強くないといけないのかというと、ぼくはそうじゃないと思ったんよ。障害者にも弱い人はいてるし、弱い障害者も立派な障害者。そんな人と一緒に活動していける団体を作りたかったんよ。もちろん地下鉄の運動では行政との交渉もやったし、必要やった。でも、行政交渉だけの運動ではいけないと思った。生活そのものを支える活動が必要だと思ったからそれを応援センターでやろうと考えたわけ――と、牧口さんは当時を振り返ってくれた。

上述の出来事を昨日のことのように年代順に話してくれる。この活動に思い入れをもった人でないとできない話し方だとひしひしと伝わってきた。話をうかがっているぼく自身が自分のことを弱いと思っているから、「弱い障害者も立派な障害者」の言葉には心の底から救われた気持ちになる。応援センターにいてていいんだと感じた。いつもしっかりと的を射たしゃべり方ができないぼくには、そのことがコンプレックスで仕方ない。強くならなきゃとか、しっかりしゃべらなきゃといったプレッシャーから少し楽になった気がした。

お話の最中、牧口さんから青い芝とのかかわりについてグループゴリラと河野秀忠さんの名前が挙がった。ぼくが学生の頃、本の中で目にした見覚えのあるお名前。今度、牧口さんに詳しくエピソードをお聞きしたいなと勝手に思っている。（文・福島義弘）

川崎バス闘争（川崎バスジャック事件）

1977年（昭和52年）4月12日、青い芝の会を全国的に有名にした「川崎バス闘争」を起こした。1976年（昭和51年）12月、神奈川青い芝の会の事務所があった川崎市内の路線バス（川崎市バス・東急バス）で、青い芝の会メンバーの車椅子での単独乗車に対する乗車拒否があった。青い芝の会は、運輸省（現：国土交通省）や東京陸運局（現：東京運輸支局）とたびたび話し合いの場を持ったが、当時のバス車両の仕様もあり、問題解決に至らなかった。

当時のバスは、床の高いツーステップバスで、車椅子用リフトやスロープ板もなく、車椅子利用者は介助者に抱え上げて乗せてもらう必要があり、安全上の理由で介助者同伴でなければ乗車が認められていなかった。介助者がいなければバス運転手が持ち上げて乗せるしかなく、腰を痛める運転手もあった。

この乗車拒否に対し、青い芝の会メンバーの脳性麻痺者60人と支援者の介助者らが全国から川崎駅前に結集、駅前に停車中の路線バス（川崎市バス・東急バス・臨港バス）に乗り込みバスジャックを行った。バス運転席のハンドルを破壊し、車内備え付けのハンマーで窓ガラスを割り、拡声器を出してアジ演説するなどして暴れ、約30台のバスに深夜まで立てこもった。強引にバスに乗り込んだり、介助者がバスに乗せて車椅子の障害者を置き去りにしたり、バスの前に座り込んで運行を止めたり、バス車内で消火液をぶちまけるなどの実力行使に出た。

この事件は、当時のテレビニュースや新聞などマスメディアでも大きく報じられ、暴力を伴う実力行使には大きな批判もあったが、公共交通機関におけるバリアフリーや乗車の問題に一石を投じた。

（ウィキペディア『全国青い芝の会』記事より抜粋）

The letter from ZENKAI-YA

作業所通信

ぜんかい屋からの手紙2023年秋号

はじめに

5月にコロナが待望の五類移行となりましたが、無くなったわけではなく、インフルエンザも夏場から流行し、最近まで誰かがコロナ・インフルやその他の感染症等で休んでいました。幸いに、重度化したり、ヘルパーさんが来てもらえない、ぜんかい屋を長期閉めるといった事態は免れていますが、引き続き警戒しつつの活動を余儀なくされています。

ここ数年は、コロナもあり、高齢化もあって健康不安も多く、また慢性的なヘルパーさん不足も深刻で、ぜんかい屋のみんなにとって安泰ではない状況ですが、多様な仲間が時にはもめたりしながらも入り混じりながら、小さくても各々の夢（やりたい事）を実現化し、良かったと思える経験を積んでいけるよう日々、できることをし、皆の行き（活き）場所・寄り（拠り）所として活動していきたいと思っております。

ここ数年で新たに加わったメンバーやスタッフの皆さんも、それぞれの個性を発揮してくれています。体調不良や家庭の事情で休んでいるスタッフやメンバーも少しづつ復帰しつつあります！

ぜんかい（全開・全快）を目指したいですね！

ぜんかい屋の主な行事等

２０２３年五月～２０２３年１０月

◇　六月十〇日　応援センター総会

◇　七月十一日　イオンイエローレシートＰＲ活動

◇　八月六日　どんどこフェスタ見学

和太鼓をやってみたい津田さんが昨年から行きたかったイベント。コロナの為、延期してましたが1年越しで行けました！

◇　八月二十三日　新スタッフ井ノ口さんデビュー

看護師さんで、とても優しい方です。ぜんかい屋のホームページを見て応募してくれました。

◇　九月二十七日　いずみホール「ゆめコンサート」鑑賞

◇　十〇月二十七日　柴島中学校　ゆめ風避難訓練

生活介護事業所　**ぜんかい屋**

電話　０６-６２４２-１１１９　ＦＡＸ ０６-６２４２-１１２０

Ｅメール　zenkai@kfz.biglobe.ne.jp

ホームページ　https://www.npo-o-center.com

ふみごんのページ

伊東　史恵

私は、５月終わりに南森町の階段からこけました。右の肘の脱臼をしました。救急車を呼んで先生に脱臼をしてしたので入れてもらいました。痛かったです。固定のまま３週間しました。自分で自分を落ち込んでいます。親とかにもしゃべられなくなりました。精神科はヘルパーさんと電車に乗れますが一人では乗れなくなってしまいました。今は、ぜんかい屋の送迎車でもらっています。ワークセンター千里には２・３ヶ月へ行っていません。行きたいと思いながら何回も繰り返すのがいやです。これではダメと思いました。買い物は明日へ行こうと思っていたのに朝になるとやめたと思ってしまいます。親に頼みます。繰り返すのが激しくなっていきました。夜中も何時間も繰り返すばかりで親に怒られるばかりで自分にも腹がたちました。コンサートもちょっとだけ楽しかったけど辛かったです。このままずっと辛い事ばかりかなと思っていました。何にも楽しくないし、辛いです。精神科に行っても変わらず、薬を何回も変えでもあかんなあと思いましたがやっと気持ちが楽になって落ち着きました。暗い穴のような太陽の光がやっと戻ってきました。しゃべるようになりました。今まで自分に戻りたいです。まだそこまで余裕がないのでぼちぼちとやります。たくさんのやるべき事があるのに今はまだやってないです。

※　ふみゴンページは、文章と校正も自分でやりました。間違いも勘弁して下さい。

日常の1コマ、感じるままに

はつこのほんわか川柳ここで一句

○彼岸まで　暑さ続くよ　いつ終わる
○嬉しいわ　洗濯物が　よく乾く
○秋晴れに　走っています　コンバイン
○夕暮れの　稲の香りに　ごちそうだ
○炊き込みの　松茸かおる　秋来たし
○朝刊を　取りに行けば　ほほに風
○新幹線　のびると縮む　在来線
○今はもう　帰らざる日々　昴かな
○菊花賞　馬券の花を　咲かせたい

○今の人　公衆電話　使えない
○奈良まちを　地図に無い町　秋の風
○八冠の　都に染めて　秋の色
○フェイスケア
　まさか自分が　ハマるかな
○庶民から　さんま焼き芋　遠ざかる
○運動会　トンボと一緒に　一等賞
○スーパーが
　ハロウィン色に　染まってる

○湯に入り　今日も一日　愚痴を言う
○美人の湯　即効性は　ないみたい
○風吹けば　服とばされて　大騒ぎ
○物価高　告げる新聞　もう値上げ
○長い夜　酒がわたしを　呼んでいる
○結局は　逢うことになる　長電話
○この暑さ　北風小僧は　どこにいる

ぜんかい屋のメンバー、はつこさんがふだんの生活のなかで気づいたことを感じるままに川柳に詠みました。時事ネタや何気ない出来事を、自身の障害からの観点も交えて十七音にちりばめています。

あたたかい光

詩

松村　美雄紀

あたたかい光あびて
私たちは生きている
あたたかい光あびて
命はある　自分を信じて

今日はさみしい金曜日

今日はさみしい金曜日

なぜなんだろう　どうしてなんだろう
今日はさみしい金曜日
心も身体もブルーです

ＫＳＫ（すたこらさん）第三種郵便物承認　２０２３年１２月３０日発行　増刊通巻第３７１０号

WANTED まず、『参加』ください！どんどん つくろう 障害者と応援者・声援者の出会いを

誰でも、
どんな形でも…

参加してください。きっと、すばらしい出会いが待っていますよ。

●障害者
　年会費　三、〇〇〇円です。

●応援者
　年会費　三、〇〇〇円です。

●声援者＝「応援センター」の趣旨に共鳴してくださる方は、活動をバックアップするため毎月一口五〇〇円を末長くご協力ください。できれば2口お願いします。

●団体声援者＝各種団体や会社で「応援センター」に資金援助してくださるグループを求めています。（年間1口3万円。もちろん、何口でも、多いほどうれしいです。）

●一時的カンパ＝もちろん大歓迎！

●すたこらさん購読者＝遠方の方（近くの方も）で応援センターの活動状況やいろいろな情報を知りたい方は購読者として参加してください。
　年会費　二、〇〇〇円です。

グループとして購読してくださる方々も大歓迎。
　1月10部発送で年会費
　一八、〇〇〇円です。

※障害者、応援者、声援者の各会費に本誌すたこらさん購読料が含まれています。また会員以外で当センターへの寄付金・カンパをいただいたみなさまに本誌をお届けしています。

もくじ

《ＫＳＫすたこらさん　2023秋号》

１．７年目の追悼集会 …… 福島　義弘 … 1
２．南くんと訪ねる思い出の場所 …… 南　勝実 … 4
３．青い芝と応援センターの関係は？ …… 福島　義弘 … 6
４．ぜんかい屋からの手紙 …… ぜんかい屋 … 8
５．ふみごんのページ …… 伊東　史恵 …10
６．はつこのほんわか川柳ここで一句 …… はつこ …11
７．詩（２篇） …… 松村美雄紀 …12
８．良返屋通信 …… 良返屋 …
９．道子でおまっ！！ …… 福島　道子 …
10．福恵の何がなんだか …… 山下　福恵 …
11．ありがとうございました …… 事務局 …

一九八四年八月二〇日第三種郵便物承認　毎月五回（5・10・15・20・25日）発行　定価二百円

編集人　特定非営利活動法人
おおさか行動する障害者応援センター
〒530-0035 大阪市北区同心２丁目６－13
エミネントヤナセ 101
電話 06-6357-5797　FAX 06-6242-1120

発行人　関西障害者定期刊行物協会
〒543-0015 大阪市天王寺区真田山町２－２
東興ビル４階
電話／FAX 06-6763-3338